(C)河北新報社

東日本大震災10年

東日本大震災から10年となるのを機に、米ハーバード大ライシャワー日本研究所がグーグルのアプリを使ったオンライン形式の企画展を開いている。津波被災地や東京電力福島第１原発事故の帰還困難区域を訪れた経験を持つ学生と卒業生ら７人が、英語で写真付きの文章や朗読した音声を寄せた。それぞれの視点で被災地への思いと復興の歩みを発信している。

復興の歩み 世界へ発信

米ハーバード大研、オンライン企画展

被災地視察 卒業生ら７人参加

写真や文章 思い紹介

卒業生で、現在は米国で反貧困ＮＰＯ団体職員を務めるモトイ・クノ・ルイスさん(24)は大学2年生だった２０１７年夏、河北新報社でのインターンシップ（就業体験）を通じて被災地を訪問。巡回ワークショップ「むすび塾」にも参加し、新聞やブログに記事を書いた。

今回の寄稿文では、児童と教員の計84人が死亡・行方不明となった石巻市大川小、南三陸町戸倉小の児童91人が逃げて助かった五十鈴神社を視察した所感などを冷静な筆致で紹介。「悲劇とヒューマニティー、希望から教訓を学んだ」とつづった。

建築家アラン・バトラーさん(72)は、米軍医だった父親のジョージさん（故人）が１９５１年に県内で撮った大量の写真を大学に寄贈した縁で参加した。２０１８、19年に石巻市や東松島市に父の足跡を訪ねており、戦後復興期の県内と復興工事が進む沿岸部とを写真で比較した。

石巻市の郷土史家辺見清二さん(73)がジョージさんの写真を基に執筆する石巻かほくの連載企画「よみがえる１９５１」の記事や、約70年前に被写体となった住民と対面したことにも触れた。「震災で家族の記録を失った人たちと１９５１年の写真を共有でき、喜びを感じる」と書いた。

展示は大学内で開く予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン形式となった。内容を充実させながら夏ごろまで続く。

展示のアドレスはhttps://artsandculture.google.com/partner/edwin-o-reischauer-institute-of-japanese-studies-harvard-university

オンライン展示の一部。2018年にバトラーさんが撮影した石巻市の旧北上川河口にある中瀬地区の写真